

1. モーツァルトと《レクイエム》

クリストフ・ヴォルフ「モーツァルトの《レクイエム》——事実とフィクション」より IN: モーツァルト研究の現在・WS01-181

1791	晩春 あるいは初夏	モーツァルトは《レクイエム・ミサ》、すなわち《死者のためのミサ曲》への匿名の依頼を受けた モーツァルトは50ドゥカーテンの謝礼を要求し、匿名の依頼者の使いは、25ドゥカーテンを前金で持参した
	9月半ば	《レクイエム》の作曲を始める
	11月20日	病床に伏す
	12月5日	モーツァルトが亡くなった時、曲はまだ完成していなかった
	12月10日	モーツァルトのための追悼ミサで《レクイエム》の最初の楽章が演奏された



ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

新しい年代研究の示すところによれば、モーツァルトは《レクイエム》の作曲を、1791年の9月半ばにプラハより帰ってから始めた。彼は11月20日に病床に伏すのであるから、《レクイエム》の作曲には、2ヵ月少々時間しかなかったわけである。しかも彼には、《魔笛》K.620(9月30日初演)の総仕上げや、クラリネット協奏曲K.622の作曲、《フリーメイソン・カンタータ》K.623(自筆の作品目録の最後に11月15日付けで記入されている)の作曲と演奏といった仕事があった。[モーツァルトの《レクイエム》——事実とフィクション より]



モーツァルト夫人

コンスタンツェ・モーツァルト

Constanze Mozart(1762-1842)

モーツァルトは彼女の姉のアロイージアに愛を拒絶されたのち、父の反対にもかかわらず、1782年にコンスタンツェと結婚。彼らの6人の子供のうち、2人だけが成人した。モーツァルトの死後、コンスタンツェは夫の作品による演奏会を企画し、またそこで歌った。夫の遺産を責任をもって処理。1809年G.N.ニッセンと結婚し、彼のモーツァルト伝の執筆を援助。[モーツァルト大事典 より]



《レクイエム》の匿名の依頼者

フランツ・フォン・ヴァルゼック伯爵

Franz von Walsegg (1763-1827)

ヴァルゼックは、1791年の2月14日に21歳の若さで世を去った妻の記念として、1曲のレクイエムを注文した。[中略]伯爵は熱狂的なアマチュアの音楽家で、演奏を、自ら指揮する計画であった。[中略]伯爵夫人を記念した《レクイエム》の礼拝における演奏は、1793年の12月14日に、ヴィーナー・ノイシュタットで行なわれた。指揮は伯爵が、「ヴァルゼック伯爵作曲の《レクイエム》」と題されたスコアから行なった。[モーツァルトの《レクイエム》——事実とフィクション より]

2. レクイエムとは

レクイエム Requiem

ローマ・カトリック教会の死者のためのミサ曲 (Missa pro defunctis) およびその楽曲。入祭唱 (Requiem aeternam dona eis, Domine (主よ、彼らに永遠の安息を与え給え)) の冒頭の言葉からその名が採られている。

この歌詞による楽曲 (およびミサそれ自体) は、単に「レクイエム Requiem」と呼ばれることが多く、その例にはモーツァルトとベルリオーズのレクイエムがある。[ニューグローヴ世界音楽大事典 より]

		ミサの構成				
		固有文 教会暦や、場合によって個別に定められた式文を用いる	通常文 常に同じ式文を用いる	祈願と朗読	レクイエムの場合	モーツァルトのレクイエム
開 催 の 儀	入祭唱 (イントロイトゥス)				イントロイトゥス (レクイエム)	I. イントロイトゥス レクイエム Requiem
			あわれみの賛歌 (キリエ)		キリエ	II. キリエ Kyrie
			栄光の賛歌 (グローリア)		(グローリアは歌われない)	
				集祷文 (集会祈願)		
言 葉 の 典 礼				使徒書朗読		
	昇階唱 (グラデュアレ)				グラドゥアーレ (レクイエム)	
	アレルヤ唱または詠唱				トラクトゥス (アプソルヴェ)	
	続唱 (セクエンツィア)				セクエンツィア (ディエス・イレ ほか いくつかの章に細分される)	III. セクエンツィア 1. ディエス・イレ Dies irae 2. トゥーバ・ミルム Tuba mirum 3. レックス・トレメンデ Rex tremendae 4. レコルダーレ Recordare 5. コンフタティス Confutatis 6. ラクリモーサ Lacrimosa
				福音朗読		
				説教		
		信仰宣言 (クレド)			(クレドは歌われない)	
				(共同祈願)		

感謝 の 典 礼	奉納唱(オフエルトリウム)		オフエルトリウム (ドミネ・イエズ)	IV. オフエルトリウム 1. ドミネ・イエズ Domine Jesu 2. ホスティアス Hostias
		叙唱		
	感謝の賛歌 (サンクトゥス)		サンクトゥス	V. サンクトゥス Sanctus VI. ベネディクトゥス Benedictus
		ミサの典文に続く「いと寛仁なる父よ」など		
		主の祈り		
	平和の賛歌 (アニュス・デイ)		アニュス・デイ	VII. アニュス・デイ Agnus Dei
	聖体拝領唱(コムニオ)		コムニオ (ルックス・エテルナ)	VIII. コムニオ ルックス・エテルナ Lux aeterna クム・サンクティス Cum sanctis
	イテ・ミサ・エスト	聖体拝領後の祈願		

3. 友人と弟子による補筆

クリストフ・ヴォルフ「モーツァルトの《レクイエム》——事実とフィクション」より

1791	12月27日	アイブラーは未亡人コンスタンツェから、完成させるためにスコアを受け取った
1792		アイブラーが断念した後ジュスマイヤーに依頼し、ジュスマイヤーが補筆・完成させた コンスタンツェは出来上がったスコアを依頼者に渡し、謝礼の残りを受け取った (ただし曲がモーツァルトによっては完成されなかったことは知らせずに)
1793	1月2日 12月14日	コンスタンツェとその子供たちのためのチャリティ・コンサートの形でヴィーンにおいて事実上の初演 ヴァルゼック伯爵夫人を記念したレクイエムの礼拝における演奏が、ヴィーナー・ノイシュタットで行われた 指揮は伯爵が、「ヴァルゼック伯爵作曲の《レクイエム》」と題されたスコアから行った
1800		ライブツィヒの音楽出版社、ブライトコップフ・ウント・ヘルテルが1800年に《レクイエム》を初出版した際に、以下のことが明らかになった ①フランツ・フォン・ヴァルゼック伯爵が著作権を主張 ②ジュスマイヤーが自分が作品の完成者であると名乗り出た



ヨーゼフ・レーオポルト・アイブラー

(Eybler, Joseph Leopold, 1765–1846)

《コシ・ファン・トゥッテ》K.588の初演のための練習を手伝い、モーツァルトの親友となった。[中略] A.サリエリの後任としてヴィーンの宮廷楽長となった。1833年、モーツァルトの《レクイエム》の指揮中に卒中の発作を起こし、辞任させられた。[モーツァルト大事典 より]



フランツ・クサーヴァー・ジュスマイヤー

(Sussmayr, Franz Xaver, 1766–1803)

モーツァルト、のちにA.サリエリから作曲を学ぶ。オペラ作曲家として成功し、1794年から終生ヴィーンの国立劇場で仕事をした。《皇帝ティートの慈悲》K.621の簡単なレチタティーヴォの作曲でモーツァルトの手伝いをし、モーツァルトが死んだため未完で残された《レクイエム》K.626と《ホルン協奏曲ニ長調》K.412+K.514(386b)を完成。[モーツァルト大事典 より]

モーツァルトが書いた部分	補筆	創作	転用
--------------	----	----	----

アイブラーによる補筆

	イントロイトゥス	キリエ	セクエンツィア		オフェルトリウム	サンクトゥス	ベネディクトゥス	アニュス・デイ	コンムニオ
	レクイエム		ディエス・イレ～コンフタティス	ラクリモサ 最初の8小節	残りの部分				ドミネ・イエズホスティアス
声楽パート									
低音楽器									
その他楽器 (オーケストレーション)									

「セクエンツィア」のオーケストレーションをほとんど完成させはしたが、「ラクリモザ」の続きを作曲することは、尊敬と畏怖の念からできなかったようで、10個ほどの音符をソプラノ・パートに付け加えただけで断念し、その仕事はジュスマイヤーに移った。

[ニューグローヴ世界音楽大事典 より]

ジュスマイヤー版 (ジュスマイヤーによって補筆・完成された版)

	イントロイトゥス	キリエ	セクエンツィア		オフェルトリウム	サンクトゥス	ベネディクトゥス	アニュス・デイ	コンムニオ
	レクイエム		ディエス・イレ～コンフタティス	ラクリモサ 最初の8小節	残りの部分				ドミネ・イエズホスティアス
声楽パート									
低音楽器									
その他楽器 (オーケストレーション)									

Introitus,
Kyrieを転用

※ジュスマイヤーの手紙より (1800年2月8日[ブライトコプフ宛])

- モーツァルトは声楽4声部と通奏低音のスコアを(オフェルトリウム)まで完全に書き上げていた。例外は(ラクリモサ)であり、これは「ちりからよみがえる qua resurget ex favilla」という節まで作曲されていた。オーケストレーションに関しては、随所にモチーフが示されていた。
- 自分(ジュスマイヤー)は、「罪ある人がさばかれるjudicandus homo reus」の歌詞のところから《レクイエム》を仕上げた。(サンクトゥス)、(ベネディクトゥス)、(アニュス・デイ)は、自分が新たに作曲した。
- 最後に、自分は曲により大きな統一を与えるために、キリエ・フーガをあえて、「主の聖人らとともにcum sanctis tuis」の歌詞で反復した。

クリストフ・ヴォルフ「モーツァルトの《レクイエム》——事実とフィクション」より

4. 20世紀以降の版

1963年	アーメン・フーガのスケッチ発見
1966年	新モーツァルト全集レクイエムの巻刊行 ・モーツァルトの書き残した部分 ・補作されたもの(ジュスマイヤー版)
1971年	バイヤー版の初演(ミュンヘン)
1986年	モーニング版の初演(ロンドン)
1990年	ランドン版の初演(ロンドン)
1991年	レヴィン版の初演(シュツットガルト)

		ジュスマイヤー		ジュスマイヤー		ジュスマイヤーを
モーツァルトが		補筆	創作	転用		修正
書いた部分		その版の編者	その版の編者			アイブラーを

バイヤー版

ミュンヘンのヴィオラ奏者バイヤー(Beyer, Franz, 1922-)による版。
ジュスマイヤーの構成を踏襲しつつもその誤りや拙劣さを洗い直そうとした。1980年出版。

ジュスマイヤーの補筆や初期の印刷譜に見られる様々な音楽上の誤りを取り除き、非モーツァルト的な書法を洗い流すことを目的に、オーケストレーションの改訂を行った。低音の和音付けにおいて、モーツァルトの他の作品を手本とし、それを基にテンポ、強弱法、アーティキュレーションの修正にあたっている。また、＜サンクトゥス＞と＜ベネディクトゥス＞を締めくくる＜ホザンナ＞では、モーツァルト的書法の終結部を付け加えている。

単純な筆写上の誤りはもちろん、その稚拙さ、凡庸さゆえにジュスマイヤーが犯さなければならなかった音楽理論上、管弦楽処理上の様々な誤りを訂正し、モーツァルト本来の音楽様式の中へこのレクイエムを戻すこと、それが、「バイヤー版」の意図するところなのである。(ピーター・ブランスクム著・CD92-356解説より)

	イントウロイトゥス	キリエ	セクエンツィア		オフエルトリウム	サンクトゥス	ベネディクトゥス	アニュス・デイ	コンムニオ
	レクイエム		ディエス・イレ ～ コンフタティス	ラクリモサ					ドミネ・イエズ ホスティアス
			最初の8小節	残りの部分					
声楽パート									
低音楽器									
その他楽器 (オーケストレーション)									

モーндガー版

イギリスの音楽学者モーндガー (Mauder, C. R. F. (C. Richard F.), 1937-) による版。
 ジュスマイヤー補筆部分を切り捨てて独自の再構成を試みた。1988年出版。

＜アグヌス・デイ＞はわずかな手直しを施して残したが、ジュスマイヤー自身の作と思われる＜サントゥス＞＜オサンナ＞＜ベネディクトゥス＞の各章は切り落としてしまった。また＜ラクリモサ＞の中のジュスマイヤーの作曲した部分は見捨てることにした。だが、ここに何か代替の曲を入れねばならない。

その箇所が入祭文と同じ短調に戻ることに、音楽は＜レクイエム＞のテーマが使われていることなどから、・・・入祭文の中の”テ・デク・ヒュムヌス”の部分のここに再使用することを思いついた。この”再現部”のあとに《アーメン》のフーガをつけることにした。(中略)オーケストレーションもまた見直しをした。(モーндガー著・CD92-353解説より)

	イントウロイトゥス	キリエ	セクエンツィア			オフェルトリウム	サントゥス	ベネディクトゥス	アニュス・デイ	コンムニオ			
			レクイエム	ディエス・イレ ～ コンフタティス	ラクリモサ					アーメン・ フーガ	ドミネ・イエズ ホスティアス	ルックス・ エテルナ	
					最初の8小節								残りの部分
声楽パート													
楽器低音部													
その他楽器 (オーケストレーション)													

ランドン版

アメリカの音楽学者ランドン (Landon, H. C. Robbins (Howard Chandler Robbins), 1926-2009) による版。

H.C.ロビンズ・ランドン(1926-)はハイドンの権威で、近年はモーツァルト研究に多くのユニークな業績をあげているアメリカの学者である。彼の校訂による＜レクイエム＞は、作品への新たな手入れというより、歴史的状況のフォローという趣を持っており、諸版のうちでも信頼性の高いものと見ることができる。
 ランドン版の最大の特色は、従来省みられることのなかったアイブ

ラーの補筆(未完のスコアに直接記入されたもの)を、ジュスマイヤーがその後やり直したものより高く評価していることである。このため、＜セクエンツィア＞のオーケストレーションには基本的にこれが採用され、アイブラーがやり残した部分への補いは、ランドン自身によって行われた。しかしそれ以降の章においては、ジュスマイヤーの補筆を尊重する方針がとられている。(磯山雅著・CD04-142解説より)

	イントウロイトゥス	キリエ	セクエンツィア			オフェルトリウム	サントゥス	ベネディクトゥス	アニュス・デイ	コンムニオ		
			レクイエム	ディエス・イレ ～ コンフタティス	ラクリモサ					ドミネ・イエズ ホスティアス	ルックス・ エテルナ	
					最初の8小節							残りの部分
声楽パート												
低音楽器												
その他楽器 (オーケストレーション)												

アイブラーの補筆を採用

レヴィン版

アメリカのピアニストであり、作曲家であるレヴィン(Levin, Robert (David), 1947-)による版。現代的頭脳によるモーツァルト様式のみごとなシミュレーション。

ロバート・レヴィンは1987年、国際バッハ・アカデミーを率いるリングから指揮法ゼミナールで行われるシンポジウムのために、モーツァルトの「レクイエム」を新たに補筆完成することを依頼された。レヴィン版はモーツァルト没後200年の年、1991年8月24日にヨーロッパ音楽祭(シュツットガルト)で初演された。

レヴィンは自身の補筆に関して次のように述べている。「私の版では200年の伝統を反映させた。できる限り少ない修正によって、モーツァルトにふさわしい性格、織り地、声部進行、流れ、構造を模倣しようと努めた。適切な過去の補筆はそのまま残し、より透明な楽器法をモーツァルトの他の教会音楽から引き出した。」(竹内ふみ子著・CD07-190解説より)

	イントロイトゥス	キリエ	セクエンツィア			オフエルトリウム	サンクトゥス	ベネディクトゥス	アニヌス・デイ	コンムニオ
	レクイエム		ディエス・イレ ~ コンフタティス	ラクリモサ		アーメン・ フーガ				ドミネ・イエズ ホスティアス
			最初の8小節	残りの部分						
声楽パート										
低音楽器										
その他楽器 (オーケストレーション)										

〈その他の版について〉

ドルース版

1994年に出版された、ヴァイオリニストのダンカン・ドルース(Druce, Duncan, 1939-)による補筆版。ヨークシャー・バッハ・クワイアー(Yorkshire Bach Choir)の委嘱による。1984年にヨーク・フェスティヴァルで初演された。

コールス版

2013年に出版された補筆版。2013年9月20日にブレーメンで初演された。クリストフ・ヴォルフ(Wolff, Christoph, 1940-)による著書、"Mozarts Requiem"に基づき、モーツァルト自身によるスケッチ、アイブラー版、コールス自身による補筆などを用いて新たに構成し直している。ベンジャミン＝グンナー・コールス(Cohrs, Benjamin-Gunnar, 1965-)は、ドイツの指揮者、音楽学者。ブルックナーの交響曲第9番の補筆版、モーツァルトのミサ曲ハ短調の完全版などでも知られる。